第六章　マジャパヒト王国の衰亡

ヒンドゥー王国の衰退とイスラム王国の勃興

第六章　マジャパヒト王国の衰亡

Gajah Mada 宰相の死後、マジャパヒト王国は少しずつ後退を続けた。その栄光は陰りを見せるようになった。マジャパヒト王国の発展の歴史に寄与した Gajah Mada の偉大さは、まずは国家元首としての Hayam Wuruk 王とマジャパヒトの国民の口にも上るようになった。Gajah Mada の偉大さに関する Hayam Wuruk 王の言葉はナガラクレタガマの第 71 節に記されている。王は Gajah Mada の死をたいそう悼み、故人と同程度の能力を有するものを探そうとした。このような経緯で王は、母の Tribuwanatunggadewi Jayawisnuwardhani と父の Sri Kertawardhana、Bhre Daha[1]とその夫の Wengker[2]王 Wijayarajasa、二人の妹とその夫の Bhre Lasem[3]と Rajasawardhana、Matahun[4]王、Paguhan[5]王の Sungawardhana を伴った Bhre Pajang[6]からなる王室会議を招集した。この会議では宰相として地位に最適と思われる人を誰も見つけることはできなかった。軍人関係で後任者を見つけようとしたのだが、これも失敗に終わった。最終的に王室会議は Gajah Mada の後任を探さないことを決定した。この空席を埋めるため、高官たちを昇進させ、Hayam Wuruk 王が親政を行う新しい内閣を組閣した。〈176〉この会議の決定に問題があるとする人がいた時には、この問題については気に留めないことにした。この地位にいろいろな視点を有する Gajah Mada に交替するに足る人はマジャパヒト地域には一人もいないことを Hayam Wuruk は実感した。三年間、宰相の椅子は空席であった。三年間にわたり、Hayam Wuruk 王は宰相の内閣を自分で率いたのであった。サカ歴 1289 年、西暦 1367 年になって初めて Gajah Enggon が宰相に昇進した。この宰相の在任期間は 27 年であった。

Gajah Mada は王国の都のみならず列島のすべての属国地域でも尊敬されたマジャパヒトの有力者として知られている。政策としての「列島の理想」の実行において、Gajah Mada がマジャパヒトの中央政府の下に列島諸地域を統一できたことは言うま

---

1 (訳) Kediri 付近
2 (訳) Ponorogo 付近
3 (訳) Rembang 付近
4 (訳) Bojonegoro と Cepu の間
5 (訳) Purwokerto 付近
6 (訳) Surakarta 市西側付近

でもない。彼の死はマジャパヒトの中央政府にとって大きな損失であったと感じられた。すなわち、征服した地域の首長たちからとても尊敬されたマジャパヒトの中央政府の高官の逸失であった。中央政府と地方との関係は緩み始めた。それ以前にマジャパヒトに服従してきたスマトラの諸国はマジャパヒトの支配から抜け出ようとしていた。Sriwijaya(三仏斉)王国は、Gajah Mada の死の 7 年後の 1371 年に Palembang, Darmaçraya, Pagaruyung (Minankabau)の三国に分裂した。15 世紀には Tanjung Pura (Kalimantan)は中国と自由な関係を結び、これはマジャパヒトとの結びつきが断絶してしまったという証拠であった。マジャパヒトの都で王権の継承権の争奪をめぐる王族間の争いが起きたので、マジャパヒトの都から遠くにある属国ではさらに支配力が低下した。都のみならず被支配地域で尊敬された人はいなくなった。都や地方の有力者の意図を制御できる人がもういなくなったのであった。〈177〉

Gajah Mada 宰相自身によって進められた「列島の理想」政策において、マジャパヒトの人たちの精神は極めて強固なものとなった。支配地域の拡大のためのすべての力の結集はマジャパヒトの人たちに物質的な豊かさを与えた。列島内の島々にある港市の支配者にとって、産品やその他の生産物で大金持ちになった被支配地域の島々とマジャパヒトの人たちによって行われた交易が簡易になった。マジャパヒトの人たちが列島全域における陸上や海上交易をすべて支配したと言える。交易の支配はマジャパヒトの艦隊と各地に中央政府が置いた軍隊の支持によるものであった。それ故、マジャパヒトは国民の平和を高めることができたのであった。マジャパヒト王国はますます富み栄えた。国民の発展と共に宗教も発展を遂げた。仏教とヒンドゥー教、バラモン教の教えに従順な大衆は祠堂を建設する余力を持つようになった。マジャパヒトとバリ地域の数十の祠堂はナガラクレタガマの第 73 節 3 項に記されているように、その大部分はマジャパヒトの国民の労働の成果であった。その中のいくつかは支配者たちの墓廟であり確かに中央政府が建設したものである。宗教的生活に必要な祠堂の建設には、高額の費用と、多数の労働者、彫刻と建築の専門家を必要とした。豊かな生活の環境下で、それ自身によって芸術的創造性は自由に発達したのであった。芸術家たちは祠堂の建設の仕事を得ることができた。彫刻師たちは働き場所を得たのであった。

Gajah Mada 宰相が亡くなりマジャパヒトが「列島の理想」政策の実行でその栄光の

頂点を極めた後、国民の精神は衰え始めた。支配者と国民の大多数は祖先の艱難辛苦の結果である生活を既に楽しむことができた。支配地域の拡大の精神はもうあらわれては来ず、Gajah Mada によって達成された支配地域を維持しようとする精神も薄くなり始めた。<178>各支配地域の港市がマジャパヒトの支配から脱したこと自体、諸地域でのマジャパヒトの人たちの交易が滞ることを意味した。その影響は国家収入の減少と国民の繁栄の衰えに出た。国家精神は内側から崩壊し始めた。中央政府と支被配地域との関係が親密ではなくなり、いくつかの地域ではすでに全く関係が切れてしまっていた。王権継承争いの影響で中央政府とジャワ島内の地域でも関係がすでにひび割れ始めた。

Hayam Wuruk 王は 1389 年に崩御した。後継の王は Kusumwardhani の夫で Hayam Wuruk 王の娘婿にあたる Wikramawardhana であった。Kusumwardhani は正室から生まれた王の娘であつた。それ故、Kusumwardhani は王国を継承する権利を持っていた。Hayam Wuruk 王には側室との間に Bhre Wirabhumi という王子がいた。Bhre Wirabhumi は王の息子としてマジャパヒト王になろうとしていたことは確実である。Wikramawardhana 別名 Hyang Wisesa がマジャパヒト王国を治めることを彼はうれしく思わなかった。ジャワのマジャパヒト王国は二つに分裂した。東側は Bhre Wirabhumi に統治された。都としてのマジャパヒトを含む西側は Wikramawardhana と Kusumawardhani 妃に統治された。マジャパヒト王国の分裂はマジャパヒト王国の支配と軍事力の粉砕を意味した。このマジャパヒト王国の分裂によって生じた二つの王国はその後互いに争うようになった。サカ歴 1323 年(西暦 1401 年)に Bhre Wirabhumi は Wikramawardhana との間で争いを起こした。三年後にこの争いは東西地域の間の骨肉相食む戦争を引き起こした。その各々のグループが各地の首長たちのみならず国民の支持を得た。Paregreg と呼ばれる Wikramawardhana と Bhre Wirabhumi との間の戦争は西暦 1404 年から 1406 年まで続いた。<179>Paregreg 戦争は政治経済面からみるとマジャパヒトの破滅をもたらしたのであった。マジャパヒトの支配は既に割れてしまい、支配力の分割は互いに損害を与えあい、ついには被征服地域と都でのマジャパヒト政府の権威は粉砕されてしまった。中央政府の弱体化は被支配地域がマジャパヒトのくびきから自分を解放する機会を与えることになった。

国家と国民の経済状態は Parereg 戦争の影響で迷走した。本来なら食糧生産のた

めに畑で働かなければならない人が戦場に駆り出されてしまった。本来なら交易に使う船は軍隊の輸送に使われてしまった。まとめると、Parereg 戦争がマジャパヒトの政治経済の破滅をもたらしたということになる。

Parereg 戦争は Gajah Mada 宰相の死後の内部抗争だけではなかった。Parereg 戦争は Kertarajasa Jayawardahan 王の子孫の間での王権の争奪のための戦争につながる緒端であった。Parereg 戦争における Bhre Wirabhumi 側の敗北は Wikramawardhana 王の子孫と同調者に対する復讐劇を引き起こした。それは Bhre Wirabhumi の首をはねた Bhre Narapati 別名 Raden Gajah への 1433 年の復讐劇であった。その四年後には Bhre Wirabhumi は Bhre Wirabhumi[7]の子孫側からの復讐を受けた。さらにその四年後には Parereg 戦争でマジャパヒトに移送された Wirabhumi の息子の Bhre Daha は支配権を奪取し Suhita 女王の治世に間つなぎの政権を建てた。1447 年に Suhita 女王が崩御した後、王権をめぐる骨肉の争いはますます激化した。最後の 30 年間にマジャパヒトは各王族出身の六人の王に統治された。互いにつぶしあった王族間の王権争奪の影響でこの諸王の治世が極めて短期間になり、サカ歴 1375 年(西暦 1453 年)から 1378 年(西暦 1456 年)までが空位になった。Sri Kertawijaya は 1447 年から 1451 年の四年間、Bhre Pamotan sang Sinagara は 1451 年から 1453 年の二年間、Hyang Purwawisesa は 1456 年から 1466 年の十年間、Bhre Pandan Salas は 1466 年から 1468 年の二年間でその後宮廷から逃げ、Singawardhana は 1468 年から 1474 年までの六年間、最後の王の Kertabhumi は 1474 年から 1478 年の四年間の治世であった。〈180〉

王家内部の戦争はマジャパヒト魂を内側から腐敗させた。外見はしっかりと立っているようであっても、実際は内部からしぼんでいったのであった。このような状態は実際には Wikramawardhana 王別名 Hyang Wisesa の治世から始まっていた。Tribuanatunggadewi Jayawisnuwardhana と Haym Wuruk 王の時代における Gajah Mada 宰相の尽力のおかげの有り余る繁栄と平和がこのマジャパヒト魂を損ねたのであった。達成した平和を守る人がいなかったのである。支配者たちの生活はすべてぜいたくで、支配地域の首長やマジャパヒトの自国民からも良くは見られていなかった。マジャパヒトの繁栄は宮廷詩人のプラパンチャによってナガラクレタガマの第 81

[7] (訳)Wikramawardhana の間違いではなかろうか。

節 2 項から第 82 節 3 項までにこう描かれている。

> これこそが caturwidya(かぐわしいもの)が良きものを追い求める理由であった。ヒンドゥー教と仏教の僧侶たちと僧院の修道者、まずは Basma の言葉が真面目に苦行を行い、宗教儀式を喜んで行った。信仰を堅持した四つのカーストの人たちすべてが各々の法を実践し、大臣と arya の双方は上手に統治し、女性とクシャトリアは信仰の堅持を思って法の実行に敬意を払った。ヴァイシャとスードラたちは喜んで各々の義務を果たした。この四つのカーストは王に認められその行動に欠点はなかった。社会でもっとも下層のチャンダラ(candela)[8]とムレッチッチャ(mleca= Mlechchha)[9]、罪悪人(tuta= Tuccha)の三グループはその階級の低さから自分を解放するように努力した。王の統治する時代のジャワはこのようであった。六波羅蜜を真面目に行ったと共に王は休みなく諸祠堂を建立し国民の心を楽しませ、母親たちは王を見るだけで満足し王のすべての行為に賛同した。<181>シンゴサリ王は Sagala に広大な農地を開き、Wengker 王は Surabaya と Pasuruan, Pajang, Rawi Lojanapura, Kapulungn の森を切り開いた。Witsari 王は Tegalwangi の部分を得た。これらすべては国民を喜ばせた。すべての首長(太守)は広い土地の下賜を楽しんだ。祠堂と尖塔、リンガが多数建てられた。神(dewa)と先祖への奉仕はますます増加した。僧侶たちは民衆に尊敬される地位を得た。法と徳は王の足跡のようにたくさんちりばめられた。

マジャパヒト王国地域の平和がどのようであったかを同宮廷詩人は第 80 節 3-4 項に短く述べている。

> 全ての免税地は碑文と共にそのまま存在し、各人の理性のすべての聖堂は守られる。力を持ち栄光の勇敢な王の人格はこうである。後世においても諸王がすべての聖堂を守り続けてほしい。この意味は、国土の表面からすべての不正を殲滅することである。それ故、海岸や山頂、森の中に自発的に住み着いている修行者たちの心を安らかにするために、海岸まで水田を渡り村々を訪ねることを王はいとわない。彼らは平穏の平和を苦行し国家の平和

[8] (訳)不可触賤民。Sudra 男性と他のカーストの女性との間の子。Sudra 以下の階層になった。
[9] (訳)カースト外の外国人

のために三昧に入っているからである。

実際に、ナガラクレタガマの内容全体には Hayam Wuruk 王と Gajah Mada 宰相の統治下のマジャパヒト国の偉大さと平和と繁栄という息吹が流れている。説明が百パーセント十分ではないとしても、国民の平和と繁栄をいかに高め、Gajah Mada 宰相の施政の質がいかに高く描かれているとしてもこの内容は信頼できる。国民とマジャパヒト国の平和と繁栄に関する証拠は、マジャパヒト王国とバリ島地域に広がった祠堂の遺跡に注目すると簡単に探すことができる。この多数の祠堂の建立は国民が経済的な能力を有していたことを示すものである。この経済的能力は国民の勤勉さによる商業と農業生産の利潤から出たものである。〈182〉列島海域での交易権はマジャパヒト人の手中にあった。各地での農地開拓はナガラクレタガマに示されている。国民の労働規律と極めて尊敬された Gajah Mada 宰相の監視下での国民の統制は Agama[10]と呼ばれるマジャパヒトの法律書に記されている。

すべてぜいたくな暮らしとこの高められた国民の平和と繁栄の中で、Gajah Mada の死後マジャパヒトの支配者たちは気が抜けてしまった。Wikramawardhana 別名 Hyang Wisesa は華人の女性と結婚した。1443 年にスマランの火薬工場長になり、その後 Palembang に華人惣代として配置転換になり Palembang の adipati (郡長)を兼任した Swan Liong 別名 Arya damar がこの結婚から生まれた。Swan Liong は自分がマジャパヒト王 Hyang Wisesa の息子であることを認めた。この件は否定できない。見かけでは Wikramawardaha 王と華人の女性の結婚は小さいのだが、実際にこの結婚はマジャパヒト王国を蚕食するばい菌を生み出したのであった。この結婚は、中国大陸から制御された華人とマジャパヒト人と間の海上交易の主権争奪に関して、より広い分野に置いて検討する必要がある。この華人女性との結婚は Wikramawardhana 王のみではなく他のマジャパヒト諸王も行っている。Kertabhumi 王も華人女性と結婚している。この結婚から 1478 年に弱冠 23 歳でマジャパヒト王国を滅ぼした Jin Bun 別名 Raden Patah が生まれた。華人女性と結婚したマジャパヒトの支配者たちが多数いたことは確かではあるが歴史には記録されていないのである。〈183〉

---

10 マジャパヒトの法律書は 1967 年に Bhratara 出版社から出版されている。そこに、マジャパヒト地域において社会的生活をいかに Hayam Wuruk 王が統制していたかを見ることができる。Gajah Mada が国民と国家の平和と繁栄のために法律を厳しく運用していたことを信じられるのである。

1289 年の中国使節の孟棋に対する Kertanagara 王の仕打ちと 1294 年の Wijaya 王子による元軍の排除は発展が始まったジャワの王国を支配しようとするフビライの敗退を指し示している。湧きあがりつつあった国家魂はまだ燃え続けそれを消すことは容易ではなかった。その闘争は生存を防衛する魂に命を与えられた。この件は既に Nararya Sanggrama 別名 Kertarajasa Jayawardhana 王に率いられたマジャパヒト王国の建国と発展初期に見たとおりである。しかしながら、その時には敗退を認めた中国はそのまま東南アジア海域を支配すると言った夢を実行する機会をうかがっていた。

1253 年に湖南省と陝西省の支配を任されていたフビライの弟が南朝と雲南王国を征服するために南方に派遣された。于謙の忠告で彼は Pai あるいは Tai に率いられた南朝王国を壊滅させた。Pai 王家は南に追い払われた。Pai 王家はシャムに避難しシャムのタイ族を構成した。雲南全土は中国の支配下に落ちた。中国全土を支配することに成功したフビライは自分を天子と呼びその王朝を大元と名付けた。フビライはアジア大陸と周辺の海を支配しただけでは物足りなかった。すべての沿岸諸国が彼の天子としての権力を認め上都に朝貢することを望んだ。彼の権力を認めず上都への朝貢を拒む誰しもが軍事力で叩きのめされたのであった。朝鮮が降伏した後、フビライは直ちに、天皇が彼の権力を認め朝貢するようにとの依頼を携えた使節を日本に派遣した。この依頼は天皇にそのまま拒否された。このような経緯で 1274 年にフビライは元軍と朝鮮軍を満載した艦隊を派遣した。<184>しかしながらこの艦隊は強風と台風に襲われ日本を占領するという意図は道半ばで挫折したのであった。この行動は 1281 年にも繰り返された。この二回目の遠征で、フビライは経験豊富な多数の華人の船乗りを利用した。しかしながら、この行動も台風の来襲のおかげで挫折したのであった。南シナ海沿岸諸国の、まずはチャンパと安南、カンボジアに対するフビライの政策は成功した。これら諸国は彼の権力を認め、朝貢使節を中国に送った。チャンパと安南、カンボジアは雲南からコントロールされる中国の属国となったのである。

農民の子の朱元璋は元王朝の軍隊を麻痺させ 1368 年に元の支配を終わらせた。朱元璋は、「明るい家族」を意味する明という新王朝を打ち立てた。1403 年から 1424 年までの永楽帝の治世において、元王朝崩壊の影響で西方諸国と中国との関係が

途切れてしまった。ペルシャとアラブ商人たちからの全ての宝石類、高品質の産品を中国は得られなくなってしまった。上都王宮にいる中国人女性は香水や真珠、エメラルドを恋しがった。このような経緯で、これらの女性たちの需要のためにぜいたく品や宝石類を集めるように外国にいる中国大使に命令を下した。1403 年以降、永楽帝はこれらの諸国との通商外交関係樹立のために艦隊を派遣した。元王朝の崩壊に伴って断絶した外交と通商関係の修復を行う必要があった。鄭和提督が南海諸国を訪問する艦隊を率いるように命を受けた。派遣された艦隊は大型ジャンク船 62 隻と 27,800 人の乗組員であった。1431 年から 1433 年までに派遣された艦隊は南海諸国を歴訪しただけではなく、そのまま西方を探検しスリランカ、インド、ペルシャ湾、東アフリカに停泊した。〈185〉この航海で、イスラム教徒の乗組員はメッカを訪れる機会を得たのであった。この乗組員の中には多数の雲南出身の華人ムスリムたちがみられた。ジャワに来る前、メッカからの帰国途上であったといわれる Raden Rahmat 別名 Bong Swi Hoo (Sunan Ngampel)は 1431 年と 1433 年の鄭和に率いられた艦隊に同乗した雲南の華人イスラムではなかったかとおもわれるのである。この航海で鄭和提督は訪問先の諸国との外交、友好、通商関係を樹立したのであった。

1397 年にマジャパヒトの手に落ちた Palembang は 1407 年に明の王朝の中国艦隊に奪われた。Palembang に華人イスラム社会を急いで形成しようとする雲南出身の華人ムスリムが Palembang に住んでいた。その年に Sambas に華人イスラム社会が形成された。東南アジアの沿岸諸国は鄭和提督の支配下に入った。鄭和提督は支配下にある東南アジアの諸都市に華人イスラム社会を形成することに大変熱心であった。その後、東南アジアの華人イスラム社会の発展を見守るために鄭和は Bong Tak Keng をチャンパの総支配人に昇格させた。ジャワでの華人イスラム社会の形成を促進するために、Bong Tak Keng は 1419 年に Gan Eng Cu をマニラから Tuban へ配置転換したのであった。Tuban は当時衰退を始めていたマジャパヒト王国への海の玄関であったので、最重要港市であった。マジャパヒト王の息子であると認められたスマランの火薬工場長の Swan Liong は Palembang の華人イスラム社会を指導するために華人惣代として Palembang に配置転換された。Bong Swi Hoo は 1445 年に Palembang の Swan Liong を補佐するためにチャンパから到来した。〈186〉1447 年に Bong Swi Hoo は Kali Porong 河口の Bangil の華人惣代に昇進した。

このようにもほぼ全ての港市は華人イスラムによって建設された。交易地でマジャパヒト王国経済の動脈をなす北岸の全港市は雲南出身の華人ムスリムに支配されていたのであった。中国からの指令に基づいて、彼らは自分たちが住んでいる国と外交通商関係を結んだ。彼らが来る前は上記の地点はマジャパヒト商人に独占されていた。ジャワ島北岸の諸港市に華人イスラム社会が存在することにより、マジャパヒトの経済の流れが詰まってしまった。マジャパヒトは海から華人ムスリムに包囲されてしまったのであった。

Serat Kanda の中の話が信じられるとしたら、この華人女性とはマジャパヒト王に貢がれた女性なのである。Babah Bantong (Ban Hong)は、王の側室になるのに最適なのは自分の娘であるという意見であった。交換条件として、彼は将来ジャワに住むようになる華人の必要性のために一区画の土地を王に願った。王は Kedu 地域の土地を与えたのであった。

詳細研究から、この Babah Ban Hong の娘は Jin Bun 別名 Raden Patah を生んだことがはっきりしている。Raden Patah はマジャパヒト王 Kong Ta Bu Mi すなわち Kertabhumi の息子である。このように華人女性はマジャパヒトの支配者たちを釣り上げるための餌になったのであった。

Swan Liong 別名 Arya Damar の父である Wikramawardhana 王別名 Hyang Wisesa の時代の 1424 年にマジャパヒトと中国との国交が正式に開かれた。雲南の軍司令官であり Bong Tak Keng の娘婿である Ma Hong Fu はマジャパヒトの都で中国大使として働いていた。すでに三回マジャパヒトの都を訪問したことのある費信に同行されて Ma Hong Fu はマジャパヒトに到来した。Ma Hong Fu のマジャパヒトの都での中国大使としての活動は 1449 年に終了した。〈187〉かれはスマラン経由で中国に戻った。1475 年になって初めて中国大使がマジャパヒトの王宮に再来した。この大使は Palembang 出身の Kin San 別名 Raden Kusen、Raden Patah 別名 Jin Bun の同腹の弟であった。華人社会にとって有用なマジャパヒトの王宮内の人間関係に関する全ての情報を与えることで華人社会の利益とすべく、Bong Swi Hoo は Kin San をスパイとしてマジャパヒトに送り込んだのであった。Swan Liong から熟した教育を受けた Kin San は Kertabhumi 王を喜ばすことに成功した。上記のように、内部からと外部からマジャパヒトの支配を崩そうとする華人イスラム社会側からの意図があったのは確かで

ある。マジャパヒト王国は内部から腐敗していき、その時が来たら外部から圧力をかけられるようになった。Jin Bun と Bong Swi Hoo の同調者としてイスラムに入信した華人とジャワ人で構成された Demak イスラム軍による攻撃は 1478 年に起きた。マジャパヒトはすでに中国のスパイに入り込まれていたが、気が付かなかった。彼らはよい親友であると考えていたのであった

後日ジャワ・イスラム社会の成立に変化する華人イスラム社会の構築許可は、まず港市で行われ、実際にはこれは宗教生活における二元主義を公式に認証するものであった。マジャパヒト王はジャワ・ヒンドゥー社会にイスラムが入ってくることを許可したのであった。いずれにせよジャワ・ヒンドゥー社会へのイスラムの侵入は社会的生活に圧力を生じさせた。社会的生活の中の圧力は王が握る権威を弱めるものであった。ジャワ・ヒンドゥー社会におけるイスラム教の公式認証はマジャパヒトの人たちの間で宗教対立の原因になったのであった。ジャワ・ヒンドゥー社会に対する華人イスラム社会からの態度はより高圧的になった。このことは単に宗教対立によるものだけではなく、民族と利益の対立でもあった。華人社会を富ませたものはまずは物質的なもので、マジャパヒト人の経済に損失を与えた。〈188〉華人はマジャパヒト人の商売に関する熱情をくじいてマジャパヒト王国の経済を破綻させようともくろんでいたのであった。彼らはジャワ・ヒンドゥー国家を崩壊させ、その後華僑と華人、混血華人たちが率いるイスラム国家を建設しようというのがかれらの意図であった。このことが、諸港市にジャワ・イスラム社会を構築する方向へと後日方向転換してしまう華人イスラム社会の構築の本来の意図であった。Bong Swi Hoo は華人社会の構築が失敗すると確信していたため、マジャパヒト地域でのジャワ人たちへのイスラム布教はイスラム教徒を増やすことと、将来イスラム国家を建設する部隊を構成する意図を含んでいた。背教した華人たちの大部分はイスラムに従わず、逆に三保洞を拝むようになり、モスクが三保洞廟に変わってしまった。イスラム教はマジャパヒトの国家権力に対抗するための霊力のある武器になった。イスラム教はヒンドゥー教と対立した。マジャパヒトにそのまま旅を続けようという Raden Kusen の誘いを Raden Patah は次の言葉[11]できっぱりと拒否したのだった。「私は既に遅すぎる。イスラム教を信じてしまったから。これは素晴らしい宗教であることを確信している。もし私が異教徒のマジャパヒト王に仕えることにな

[11] Babad Tanah Jawi, II 巻 p38

ったら私のイスラム性がもったいない」と。この文と共に Babad Tanah Jawi の作者は Ngampel でのイスラム社会の構築の問題の本質をはっきり描いている。マジャパヒト王に主催されているヒンドゥー教を壊滅させるために宗教的熱狂が Bong Swi Hoo の同調者にとっての霊力ある武器になった、と。

地位は権力をもたらし、権力は同調者を作り出したり希望する何かを作り出すものである。マジャパヒトのジャワ・ヒンドゥーの封建社会において高い地位を得るためには華人ムスリムの指導者たちは、有力者たち特にマジャパヒト王にうまく仕えなければならなかった。〈189〉彼らは menuju karsa「希望に至る」ことに上手でなければならなかった。このように華人惣代の Gan Eng Cu は、マジャパヒト王に仕えるのが上手だったために、Suhita 女王から arya の称号を賜った。それと共に Gan Eng Cu はジャワの名前を持った。正確な名前と称号は Tumenggung Wilatikta Arya Teja であった。Swan Liong も arya の称号を得て、Jin Bun は将軍の称号を得たのであった。その称号ゆえに、彼らはまだ封建的な面を有するジャワ・ヒンドゥー社会で尊敬を得たのであった。この称号で、かれらは宮廷の職員やマジャパヒト王の大衆から同調者をより簡単に得ることができるようになった。王からの称号の授与は、王あるいは国家への功績ゆえに、称号を与えられたその人が十分堪能するために与えられた称号に関係する権利を得た、という意味を含んでいる。事実上マジャパヒトの支配を崩壊させるための準備であった Jin Bun 別名 Raden Patah による Bintara の密林の開拓は、Raden Patah が将軍という称号を持っていたこととその密林の開拓を王が公式に認めたゆえに、この作業を疑う者は誰一人としていなかった。この Jin Bun の行動は事実上マジャパヒトの権力に抵抗するための秘密あるいは地下行動であった。称号の褒賞は華人イスラム社会の利益に取り込まれてしまった。

Swan Liong と Jin Bun はマジャパヒト王の子供であったが、ジャワ人と華人の混血として華人イスラム社会の利益のためにだけ働いた。その当時、マジャパヒト王はまだ独立国の王として存在しその地域を支配していたにもかかわらず、彼らにとって kejawaan (ジャワ人精神)についての誇りという感覚は全くなかった。Swan Liong と Jin Bun は父親の血統ではなく母親の血統に従って中国グループに味方したのであった。あたかもマジャパヒト王との血族関係が無いようであった。マジャパヒト王との血族関係は華人イスラム社会が阻害されたときにのみ利用された。Bong Swi Hoo の提案で、

Jin Bun 別名 Raden Patah は将軍の称号と Bintara での破壊活動の認証を受けたのであった。〈190〉Swan Liong はスマランの火薬工場長と華人惣代そしてその後は Palembang の華人惣代としての地位を得た。彼らは、当時のジャワ・ヒンドゥー社会とは全く異なる華人イスラム社会で育てられたのであった。そのことから、彼らはジャワ・ヒンドゥー社会に敵対する華人イスラム社会の考え方に自分を合わせたのであった。

しかし、マジャパヒト王と血族関係をもつ混血華人はマジャパヒト王国を麻痺させる道具になったことで賞賛された。この件で Jin Bun 別名 Raden Patah は重要な役割を演じた。Jin Bun はあらゆる業務において勤勉で忍耐強く頭脳明晰な性質を華人側から受け継いだ。マジャパヒト/ジャワ側から彼は指導者としての性質を受け継いだ。イスラム法学者としての Bong Swi Hoo との交際で、宗教的熱情を得た。Swan Liong に養育されたことから Jin Bun は軍隊魂を得て、武器の使用と製造が上達した。彼の忍耐力と指導性を伴った仕事に対する勤勉さのおかげて、三年間にかれは Bintara の森の開墾と宗教的情熱を持つ千人以上の同調者を集めることに成功した。1447 年にはその勢力は非イスラム華人の支配からスマランを奪うためにすでに十分になった。イスラムを信仰していない華人たちの同情を得るため、Demak 軍の攻撃から華人廟を守り、イスラムを信仰していない華人たちに対する残虐な行為を避けたのだった。その指導性のおかげで Jin Bun は敵をじょうずに味方に引き入れたのだった。彼は、マジャパヒトの権力を崩して、将来ジャワ沿岸に大きな艦隊を有するイスラム国を建国する夢をかなえるために彼らの労働力と技術力が必要であったからである。Jin Bun はマジャパヒトを攻撃する機会を狙っていた。

その時がやってきた。Bong Swi Hoo 別名 Sunan Ngampel が亡くなったのである。〈191〉Sunan Ngampel は常に、マジャパヒト王は一度でもイスラムの布教を邪魔したことがないからマジャパヒト王に対して暴力や軍事力を決して行使してはならないと Jin Bun に言い聞かせていたが、すでに亡くなった。忠実で最愛の生徒として Jin Bun が必ず Ngamepl に立ち寄ると思われていた。おそらく Ngampel に立ち寄って、Jin Bun はマジャパヒトの王宮を急襲する Demak 軍を率いるものだと思われていたのだろう。それ故、マジャパヒトの王宮では何の準備もしていなかった。Jin Bun はやすやすと Kertabhumi 王を捕えて Demak に送ることに成功した。マジャパヒトは無抵抗で無血降伏したのだった。王宮の財宝やマジャパヒト王国の大きさを示す貢物はことごとく

Demak に送られその量は馬七頭分であった。三年間にわたりマジャパヒトの都でスパイ活動をしていた Kin San も Demak にともに戻った。マジャパヒトの都は何の破壊も受けなかった。何も起こらなかった。内側から砕けてしまい、経済と宗教心を破壊し、国家魂を損ない、急激な外圧でマジャパヒト王国は抵抗がかなわなくなってしまった。184 年間独立を保ち、栄光の時代を通過し、列島のすべてから尊敬とともに怖がられたマジャパヒトは、戦うことも血を流すこともなく 23 歳の青年に征服されてしまったのであった。Kertabhumi は Jin Bun 将軍の父親であるから Demak では尊敬を持って扱われた。

Kertabhumi の娘婿の Dyah Ranawijaya Girindrawardhana は Jin Bun によって Demak の属国の太守に任命され、自称 Wilatika, Janggala, Daha, Kediri の王であった。属国としてマジャパヒトは Demak サルタンの意図と命令に服従し、毎年税金を納めねばならなかった。Demak の属国としてマジャパヒトは Dyah Ranawijaya Girindrawardhana 別名 Pa Bu Ta La の支配下でさらに 49 年間存続したのであった。<192>Dyah Ranawijaya Girindrawardhana が Demak イスラム国にとって最大の敵であったポルトガル人と通商関係を持ったため、Toh A Bo 別名 Sunan Gunung Jati に率いられた Demak 軍によって焦土作戦を敢行されたため 1527 年になって初めてマジャパヒト王国が地上から消えたのであった。

訳出終了 2015/9/13

校正 2015/10/06

校正 2015/10/28